

Karen L. Kramer,

Maya Children: Helpers at the Farm.

Cambridge, Mass. and London, England:
Harvard University Press, 2005, xv + 254pp.

よね むら あき お
米 村 明 夫

本書は、時間配分調査 (time allocation study) という技法を使って、メキシコ先住民であるマヤの児童労働の実態を把握し、その家族経済における意義を分析したものである。著者は、序章で児童労働の家族の経済への貢献に行動生態学 (人類学) と経済学の双方の問題関心からアプローチするとしている。だが、実際には前者の関心が中心であり、それは、調査対象を農業による生存維持経済 (subsistence economy) を営んでいる村としたことと密接に関連している。以下、1992～93年にかけての調査の分析結果、分析手続のエッセンスを紹介しよう。

(1) 親と一緒に住んでいる結婚していない26人の男子 (3歳から23歳まで)、33人の女子 (3歳から20歳まで) についての午前7時から午後6時までの11時間の観察結果によると、男子は平均的に、その33パーセントが労働時間であり、女子は同じく35パーセントが労働時間であった (p.192, Table 6.14, より詳しい年齢グループ別労働時間分布がTable 6.16にある)。

児童の経済的な貢献の計量的把握のためには、(1) のような労働時間データが示す児童の生産活動 (労働) の価値や労働・生活活動全般に要する費用 (= 消費) を同一の単位で表現し、それら労働の価値と消費の大きさを比較する必要がある。本書では、性・年齢別の労働の価値は、同一種類の労働については、性・年齢別の単位時間あたりの生産量 (収益率) の比によって測られ (トウモロコシの収穫、薪収集の場合。他の労働に関しては、性別のデータは得られないので、年齢別データに一定の性別係数をかける)、異なった労働間の価値の違いは、各労働に必要なカロリーの比によって測られている。また費

用は、生産を分配面から把握することによって測られる。すなわち、家計単位でみると、総生産と総費用は等しい、家計の総生産の80パーセントは食料生産関係の生産であり、それは家計各メンバーの一日の必要カロリーの比にしたがって分配される (一日の必要カロリーは、体重、性、年齢、一日の平均的な活動レベルによって計算される)、家計の総生産の20パーセントは、各メンバーに平等に分配される、という仮定に基づき、各メンバーの消費が測られている (pp. 124-128)。

(2) こうした計測結果に基づく、こどもの労働の価値がその消費より大きくなる、すなわちこどもが「純生産者」となるのは、男子では17歳、女子では14歳である (p.196, Table 7.4)。さらに、消費と生産を誕生以来累積して計算した場合、「純生産者」となるのは、男性30歳、女性31歳であり、それぞれ結婚してその家族から離れる平均年齢22歳、19歳よりかなり後である (p.142)。つまり、誕生以後親元を離れるまでを総計すると、親にとってこどもはネットのコストファクターということになる。

(3) では何故、親は多くのこどもを持つとするのであろうか。著者は、避妊技術が採用されていない社会においても、親はこどもを産むタイミングを調節し、ある程度こどもの数の調節を行っているとする。そして、ライフサイクルにおける一連の出産の決定が、家族内の従属人口が増加する時期にこどもの経済的な貢献が増大するようになされていることを示して、「合理性」を持つことを指摘している (pp. 143-151)。

(4) また、ポンプなどの女性の労働時間を節約する技術の導入が、女性の初産年齢を21.2歳から19.5歳に早めたことを実証している (p.160)。

発展途上国における児童労働の問題への関心は、途上国社会が近代化し、市場経済が浸透していくなかで発生する児童労働の反福祉的性格から呼び起こされてきた。本書の生存維持経済における児童労働は、そうした問題の児童労働との比較のための参照事例を提供するものとして理解することができよう。

(アジア経済研究所開発研究センター)